

## 宗教にたいする労働者党の態度について

……………宗教にたいする自党の態度を公けに述べることは、社会民主党の無条件の義務となっている。

社会民主党は、その世界観全体を科学的社会主義、すなわちマルクス主義の基礎のうえに立てている。マルクスもエンゲルスもたびたび言明したように、マルクス主義の哲学的基礎は弁証法的唯物論であるが、これはフランスにおける十八世紀の唯物論とドイツにおける（十九世紀前半）フォイエルバッハの唯物論——無条件に無神論的で、あらゆる宗教に断固として敵対した唯物論——との歴史的伝統を完全にうけいれている。エンゲルスの『反デューリング論』〔第14巻〕は、手稿のうちマルクスが目をとおしたものであるが、この本の全巻を通じて、唯物論者で無神論者のデューリングがその唯物論において一貫性を欠き、宗教と宗教哲学とのために逃げ道をのこしていることを暴露していることを、注意しよう。エンゲルスが、ルードウィヒ・フォイエルバッハを論じたその著作〔第15巻〕のなかで、フォイエルバッハが宗教を廃棄するためではなしに、宗教を修理し、新しい「たかめられた」宗教をあみだす、等々の目的で、宗教とたたかった点を責めていることを、注意しよう。宗教は民衆の阿片である——このマルクスの格言〔補巻4、174ページ〕は、宗教の問題におけるマルクス主義の世界観全体のかなめ石である。マルクス主義は、現代のすべての宗教と教会、ありとあらゆる宗教団体は、労働者階級の搾取を擁護し、彼らを麻酔させる役をする、ブルジョア反動の機関であると、つねに考えている。

しかし、それと同時にエンゲルスは、社会民主党よりも「いっそう左翼的に」、または「いっそう革命的」になろうとのぞんだ人々が、労働者党の綱領のなかに、宗教にたいする宣戦布告という意味での無神論のあからさまな承認をもちこもうとしたことを、たびたび非難した。1874年に、ロンドンに亡命者としてくらしていたブランキ派コンミュン亡命者の有名な宣言を論じて、エンゲルスは、彼らが宗教にたいする戦いを騒々しく宣言したのは愚かなことだと言い、このような宣戦布告は、宗教にたいする関心をよみがえらせ、宗教が実際に死滅するのを妨げるいちばん良い方法である、と言明している。エンゲルスは、ブランキ主義者がつぎのことを理解てきない点で非難した。それは、労働者大衆の階級闘争だけが、意識的、革命的な社会的**実践**にプロレタリアートのもっとも広範な層を全面的にひきいれることにより、実際に被抑圧大衆を宗教の圧迫から解放できるのであって、これに反して、宗教との戦いを労働者党の政治的任務と宣言するのは、無政府主義的な空文句である、ということである〔第13巻、70～71ページ〕。1877年にも、『反デューリング論』のなかで、エンゲルスは、哲学者デューリングが観念論と宗教とにおこなっているほんのすこしの譲歩をも容赦なく責めたてながらも、社会主義社会では宗教は禁止されるというデューリングのえせ革命的な考えをも、前者におとらず断固として非難している。エンゲルスは言っている、宗教にたいしてこういう戦いを布告するということは、つまり「ビスマルクその人に輪をかけてビスマルク的になること」、すなわち、教権派にたいするビスマルクの闘争（悪名たかい「文化闘争」Kulturkampf すなわち、1870年代にビスマルクが、警察にカトリック教を迫害させるというやり方でドイツのカトリック政党、「中央党」にたいしておこなった闘争）の愚かしさをくりかえすということである、と。

こういう闘争をやったのでビスマルクは、かえってカトリック教徒の戦闘的教権主義をつよめ、ほんとうの文化の事業に害をあたえただけであった。なぜなら、彼は、政治的分裂のかわりに宗教上の分裂をおもな地位におしだし、労働者階級と民主主義派との若干の層の注意を、階級闘争と革命闘争との緊切な諸任務から、もっとも皮相的な、にせのブルジョア的な反教権主義のほうにそらせたからである。超革命的であろうとねがったデューリングは、ビスマルクと同じ愚かしさを別の形でくりかえそうとしているのだといって非難しながら、エンゲルスは、労働者党にたいして、宗教との政治的戦いという冒険にのりだしたりしないで、プロレタリアートを組織し教育する仕事、宗教を死滅させる仕事のために忍耐づよくはたらく能力をもつように要求している〔第14巻522~525ページ〕。この立場は、ドイツ社会民主党の血となり肉となった。たとえば、同党は、ジェズイット宗派に自由をあたえよ、彼らにドイツへの入国の許可をあたえよ、あれこれの宗教との警察的闘争のあらゆる方策を廃止せよと主張した。「宗教は私事であると宣言すること」——このエルフルト綱領（1891年）の有名な条項は、右に述べた社会民主党の政治的戦術を確認したものである。

この戦術は、いまではすでにおきまりのものとなっており、反対の方向への、すなわち日和見主義のほうへのマルクス主義の新しい歪曲をうちだすまでになった。エルフルト綱領のこの命題は、われわれ社会民主主義者が、わが党が宗教を私事とみなすという意味に、社会民主主義者としてのわれわれにとって、党としてのわれわれにとって、宗教は私事であるという意味に、解釈されるようにたった。エンゲルスは、この日和見主義的な見解にたいして直接論戦はしなかったが、1890年代に、この見解にたいして、論戦の形ではなく、積極的な形で断固として反対する必要があると考えた。すなわち、エンゲルスは社会民主党が宗教を私事とみなすのは、けっして自分自身にとってではなく、マルクス主義にとってではなく、労働者党にとってではなく、**国家にとって**である、と声明し、この声明をわざわざ強調するという形で、右の見解に反対したのである〔第11巻、379ページ〕。

以上が、宗教の問題についてマルクスとエンゲルスがおこなった発言の外面的な歴史である。マルクス主義にたいしていかげんな態度をとっている人々、ものを考える能力がなく、または考えたがらない人々にとっては、この歴史は、マルクス主義の無意味な矛盾と動揺とのかたまりである。すなわち、〔首尾一貫した〕無神論と宗教の「あまやかし」とをまぜあわせた雑炊のようなものであり、神にたいするカ、カ、カクメイ的な戦いと、信仰心のある労働者に「とりいり」たいという臆病な願い、彼らをこわがらせはしないかという不安とのあいだの「無原則的な」動揺とでもいうもの、等々である。無政府主義的な空語家たちの文献には、こういう趣旨で書かれたマルクス主義攻撃を、すくなく見いだすことができる。

しかし、マルクス主義にたいしていくらかでもまじめな態度をとり、その哲学的基礎と国際社会民主主義運動の経験とをよく考えることのできるものには、宗教にかんするマルクス主義の戦術が深く首尾一貫したものであり、マルクスとエンゲルスが考えぬいたものであること、素人や無学な人間が動揺だと考えるものが、弁証法的唯物論から直接に、また不可避免的にでてくる結論であることが、たやすくわかるであろう。宗教にかんするマルクス主義の外見上の「穏健さ」は、「こわがらせたくない」という願い、等々の意味での、いわゆる「戦術上の」考慮によるものだと考えるのは、深い誤りであろう。そうでは

なくて、この問題でもマルクス主義の政治的方針は、その哲学的基礎と切りはなすことのできないようにむすびついている。

マルクス主義は唯物論である。唯物論としてのそれは、宗教にたいして容赦なく敵対する点では、十八世紀の百科全書派の唯物論や、フォイエルバッハの唯物論に、おとらない。このことは争う余地のないことである。しかし、マルクスとエンゲルスの弁証法的唯物論は、唯物論哲学を歴史の分野に、社会科学の分野に適用することによって、百科全書派やフォイエルバッハをこえてすすむのである。われわれは宗教とたたかわなければならない。このことは、唯物論**全体**の、したがってまたマルクス主義のイロハである。しかし、マルクス主義は、イロハに立ちどまっている唯物論ではない。マルクス主義はそれをこえてすすむ。それは言う。宗教との戦い方を**理解する**必要がある。だが、それには、大衆のあいだにある信仰や宗教の源泉を**唯物論的に**説明する必要がある、と。宗教との闘争を抽象的＝思想的な説教にとどめてはならない。そういう説教に帰着させてはならない。この闘争を、宗教の社会的根源をとりのぞくことをめざす階級的運動の具体的実践にむすびつけることが、必要である。なぜ宗教は、都市プロレタリアートのおくれた層のあいだに、半プロレタリアートの広範な層のあいだに、さらに農民大衆のあいだに、生きながらえているのか？ 人民の無学のためだ、とブルジョア的進歩主義者、急進主義者、またはブルジョア的唯物論者はこたえて言う。だから、宗教をたおせ、無神論万歳、無神論的見解をひろめることがわれわれの主要な任務だ、と。マルクス主義者は言う。それはほんとうでない。そのような見解は、皮相的な、ブルジョア的に狭い文化主義である。そのような見解は、宗教の根源を十分にふかく、唯物論的に説明しないで、観念論的に説明するものである。現代の資本主義諸国では、この根源はおもに**社会的な**ものである。勤労大衆が社会的におしひしがれていること、戦争や、地震などのような異常な出来事のどれにくらべてもなお千倍も恐ろしい苦しみ、千倍も荒々しい苦痛を、日々、刻々、普通の働く人々にあたえる資本主義の盲目的な力にたいして、この勤労大衆がまったく無力なように見えること、——これこそ、宗教の現代におけるもっとも深い根源である。「恐怖が神々をつくりだした」。資本の盲目的な力——人民大衆には予見できないために盲目的な力、プロレタリアと小経営主の生活の一步ごとに、「不意の」、「思いがけない」、「偶然の」零落や、滅亡や、こじき、窮民、売笑婦への転落や、餓死をもたらそうとし、また実際にもたらす力にたいする恐怖、——これこそ、現代の宗教の**根源**であって、もし唯物論者が、いつまでも予備学級の唯物論者でありたくないなら、なによりもまずこのことを念頭におかなければならないのである。資本主義の苦役にうちのめされ、資本主義の盲目的な破壊力に左右されている大衆みずからか、団結して、組織的、計画的、意識的に、宗教のこの**根源**にたいして、すなわちいっさいの形態における**資本の支配**にたいして、たたかうことをまなばないうちは、どのような啓蒙書もこの大衆のあいだから宗教を駆逐しはしないであろう。

このことから、宗教に反対する啓蒙書が有害であるとか、無用であるとかという結論がでてくるだろうか？ いや、けっしてそういう結論はでてこない。このことからでてくる結論は、社会民主党の無神論の宣伝は、党の基本的任務に、すなわち搾取者にたいする被搾取大衆の階級闘争を発展させる任務に、従属されなければならないということである。

弁証法的唯物論、すなわちマルクスとエンゲルスの哲学の基礎についてふかく考えたことのない人には、この命題は理解できない（あるいは、すくなくとも、すぐには理解でき

ない)。どうしてそうなのか？ 思想的宣伝を、ある思想の伝道を、数千年も生きながらえているような文化と進歩の敵（すなわち宗教）との闘争を、階級闘争に、すなわち経済のおよび政治的分野における特定の実践的目標のための闘争に、従属させるのか？

このような反論は、マルクス主義にたいする流行の反論の一つであって、マルクスの弁証法にたいするまったくの無理解を証明するものである。このように反論する人々をくるしめている矛盾は、生きた生活の生きた矛盾、すなわち弁証法的な矛盾であって、言葉のうへの矛盾、頭で考えだした矛盾ではない。無神論の理論的宣伝と、すなわちプロレタリアートの一定の層のあいだにある宗教的信仰を破壊することと、この層の階級闘争の成功、歩み、諸条件とを、絶対的な、こえることのできない境界線で分離することは、非弁証法的にものを考えることであり、可動的な、相対的な境界線でしかないものを絶対的な境界線にかえることであり、生きた現実において切りはなしえないようにむすびついているものを、むりやりに切りはなすことである。例をとってみよう。ある地方のある産業部門のプロレタリアートが、かなりに自覚した、もちろん無神論者の、社会民主主義者の先進的な層と、かなりにおくれた、まだ農村や農民とむすびついている労働者とに、わかれていると仮定しよう。そして、この後者は神を信じ、教会にかよっているか、あるいは、キリスト教的労働者協会を創立した土地の聖職者の直接の影響さえもうけていると仮定しよう。さらに、この地方での経済闘争がストライキになったと仮定しよう。マルクス主義者は、ストライキ運動の成功を第一に重要視する義務があり、この闘争のさいに労働者を無神論者とキリスト教徒とにわけたりすることに断固として反抗し、このような分裂にたいして断固としてたたかう義務がある。こういうばあいには、無神論の宣伝は無用で、有害なものになるかもしれない。——というのは、おくれた層をこわがらせないようにとか、選挙で落選してはいけない、などという俗物的な考慮の見地からしてそうなのではなく、階級闘争の真の進歩という見地からいってそうなのである。現代の資本主義社会の環境のもとでは、この階級闘争は、むきだしの無神論の宣伝よりも百倍もよく、キリスト教的労働者を社会民主党に導き、また無神論に導くであろう。こういう時機に、そしてこういう状況のときに無神論を説くものは、ストライキに参加するかどうかで労働者を分けるのではなく、神を信じるかどうかで分けたいと、なによりものぞんでいるこの坊主や坊主どもの**手助け**をすることにしかならないであろう。ぜがひでも神との戦いを説教する無政府主義者は、実際には、坊主どもやブルジョアジーを援助していることになるのである（無政府主義者は、いつでも**実際には**、ブルジョアジーを援助しているのだが）。マルクス主義者は、唯物論者、すなわち宗教の敵でなければならないが、しかし弁証法的唯物論者でなければならない、すなわち、宗教との闘争の問題を、抽象的に、いつも同じ抽象的・純理論的な説教にもとづいて提起するのではなく、具体的に、実際におこなわれており、なににもまして、またなによりもよく大衆を教育する階級闘争にもとづいてそれを提起する、弁証法的唯物論者でなければならないのである。マルクス主義者は、具体的環境全体を考慮に入れ、無政府主義と日和見主義とにたいする境界線（こういう境界線は相対的、可動的、可變的ではあるが、しかしあることはある）をいつでも見いだすことができなければならないし、無政府主義者の抽象的な、口先だけの、実際には空虚な「革命主義」におちいってもならず、また宗教との闘争をおそれ、この自分の任務をわすれ、神の信仰と仲なおし、階級闘争の利益によって導かれるのではなく、人の気をわるくしまし、反撥させまい、

こわがらせまい、というちっぽけな、みじめな打算によって、「己れも生きよ、他も生かせ」という処世訓等々によって導かれる小ブルジョアや自由主義的インテリゲンツィアの俗物主義と日和見主義とにおちいってもならないのである。

宗教にたいする社会民主党の態度に関係のある部分的問題は、みな右に述べた見地から解決しなければならない。たとえば、聖職者は社会民主党の黨員になれるか、という質問がしばしば提出されているが、普通はこの問にたいして、ヨーロッパの社会民主党の経験をよりどころとして、なんの留保もつけずに、なれる、という答があたえられている。しかし、この経験は、マルクス主義の学説を労働運動に適用した結果として生まれただけでなく、またロシアには存在しない西欧の特殊な歴史的諸条件（これらの条件についてはあとで述べよう）によって生みだされたものであるから、このばあいに無条件に、なれる、とこたえるのは正しくないのである。われわれは、聖職者は社会民主党の黨員になれないと、きっぱりと、あらゆるばあいについて宣言してはならないが、しかしまたその反対の規則をきっぱりとうちたててもならない。もし聖職者が、共同の政治活動をするためにわれわれのところに来て、良心的に党活動をはたし、党の綱領に反対しないなら、われわれは彼を社会民主主義者の隊列にうけいれてもよい。なぜなら、こういう事情のもとでは、われわれの綱領の精神や原理と、その聖職者の宗教的信念との矛盾は、彼だけに関係した、彼の個人的な矛盾にとどまることができようし、また政治組織は、自己の成員の見解と党の綱領とのあいだに矛盾がないかどうか、黨員を試験するわけにはいかないからである。しかし、もちろん、このようなばあいは、ヨーロッパでさえまれな例外でしかありえないし、ロシアでは、まったくありそうもないことである。そして、たとえば、ある聖職者が社会民主党にはいり、この党のなかで、彼の主要な、ほとんど唯一の活動として、宗教的見解を活潑に説教することをはじめたとしたら、党は無条件に彼を党の隊列から除外しなければならないであろう。われわれは、神の信仰をもちつづけている労働者のすべてにたいして、社会民主党への加入をみとめるだけでなく、とくに彼らを党に引きいれなければならない。われわれは、彼らの宗教的信念をすこしでも侮辱するようなことには、無条件に反対である。しかし、われわれが彼らを引きいれるのは、われわれの綱領の精神で教育するためであって、この綱領に反対する活潑な闘争をやらせるためではない。われわれは党内で意見の自由をみとめるが、それは、グループ形成の自由ということによってきまる一定の限界内でのことである。党の多数者が拒否する見解を活潑に説教するような人々と手をつないですすまなければならない義務は、われわれにはない。

いま一つ例をとろう。社会民主党の黨員が、「社会主義は私の宗教である」と声明し、このような声明に合致する見解を説教したという理由で、どんな事情のもとでも一律に彼らを非難することができるであろうか？ できない。このばあいマルクス主義にたいする（したがってまた、社会主義にたいする）背反があることは疑いないが、この背反の意義、そのいわば比重は、事情がいろいろであるにしたがっていろいろでありうる。煽動家または労働者大衆にむかって演説する人が、話をわかりやすくするために、話の糸口をつけるために、未熟な大衆のいちばんつかいなれた用語をつかって自分の見解をいっそう現実的にうきあがらせるために、こう言うときと、著作家が「創神主義」または創神主義的社会主義を説教しはじめるとき（たとえばわがルナチャルスキー一派の精神で）とでは、事からは別である。まえのばあいには、それを非難することは言いがかりをつけることか、

あるいは煽動家の自由、「教育者として」働きかける自由を不適當に圧迫することにさえなりかねないが、あとのばあいには、党にはそれを非難する必要があり、義務がある。「社会主義は宗教である」という命題は、ある人々にとっては宗教から社会主義にうつっていく形態であるが、他の人々にとっては、社会主義から宗教にうつっていく形態なのである。

さてこんどは、西欧で「宗教は私事であると宣言する」という命題の日和見主義的な解釈を生みだした事情にうつろう。もちろん、ここには、労働運動の根本的利害を一時的利益の犠牲にするものとしての、日和見主義一般を生み出す一般的な原因が働いている。プロレタリアートの党は、**国家にむかっては宗教は私事であると宣言するように要求するが**、民衆の阿片との闘争、宗教的迷信との闘争、等々の問題が私事であるとはけっして考えない。日和見主義者は、社会民主党が宗教を私事とみなしているかのように、問題をねじまげる！

第15巻P392～400『宗教にたいする労働者党の態度について』

『プロレタリー』第45号、1909年5月13（26）日

## ポイント

宗教は民衆の阿片である——このマルクスの格言は、宗教の問題におけるマルクス主義の世界観全体のかなめ石である。マルクス主義は、現代のすべての宗教と教会、ありとあらゆる宗教団体は、労働者階級の搾取を擁護し、彼らを麻酔させる役をする、ブルジョア反動の機関であると、つねに考えている。

しかし、それと同時にエンゲルスは、社会民主党よりも「いっそう左翼的に」、または「いっそう革命的」になろうとのぞんだ人々が、労働者党の綱領のなかに、宗教にたいする宣戦布告という意味での無神論のあからさまな承認をもちこもうとしたことを、たびたび非難した。エンゲルスは、労働者大衆の階級闘争だけが、意識的、革命的な社会的実践にプロレタリアートのもっとも広範な層を全面的にひき入れることにより、実際に被抑圧大衆を宗教の圧迫から解放できるのであって、これに反して、宗教との戦いを労働者党の政治的任務と宣言するのは、無政府主義的な空文句であるとした。また同時に、哲学者デューリングが観念論と宗教とにおこなっているほんのすこしの譲歩をも容赦なく責めたてるとともに、社会主義社会では宗教は禁止されるというデューリングのえせ革命的な考えをも、前者におとらず断固として非難している。エンゲルスは、労働者党にたいして、宗教との政治的戦いという冒険にのりだしたりしないで、プロレタリアートを組織し教育する仕事、宗教を死滅させる仕事のために忍耐づよくはたらく能力をもつように要求している。

「宗教は私事であると宣言すること」——このエルフルト綱領（1891年）の有名な条項は、国家にとって私事であるという意味であり、われわれ社会民主主義者が、わが党が宗教を私事とみなすという意味に、社会民主主義者としてのわれわれにとって、党としてのわれわれにとって、宗教は私事であるという意味ではない。

宗教にかんするマルクス主義の外見上の「穏健さ」は、「こわがらせたくない」という願い、等々の意味での、いわゆる「戦術上の」考慮によるものだと考えるのは、深い誤りである。われわれは宗教とたたかわなければならない。このことは、唯物論全体の、したがってまたマルクス主義のイロハである。しかし、マルクス主義は、宗教との戦い方を理解する必要がある。大衆のあいだにある信仰や宗教の源泉を唯物論的に説明する必要がある。

この闘争を、宗教の社会的根源をとりのぞくことをめざす階級的運動の具体的実践にむすびつけることが、必要である。「なぜ宗教は、都市プロレタリアートのおくれた層のあいだに、半プロレタリアートの広範な層のあいだに、さらに農民大衆のあいだに、生きながらえているのか？」を、宗教の根源を十分にふかく、唯物論的に理解しなければならない。現代の資本主義諸国では、この根源はおもに社会的なものである。勤労大衆が社会的におしひしがれていること、戦争や、地震などのような異常な出来事のどれにくらべてもなお千倍も恐ろしい苦しみ、千倍も荒々しい苦痛を、日々、刻々、普通の働く人々にあたえる資本主義の盲目的な力にたいして、この勤労大衆がまったく無力なように見えること、一一これこそ、宗教の現代におけるもっとも深い根源である。資本主義の苦役にうちのめされ、資本主義の盲目的な破壊力に左右されている大衆みずからか、団結して、組織的、計画的、意識的に、宗教のこの根源にたいして、すなわちいっさいの形態における資本の支配にたいして、たたかうことをまなばないうちは、どのような啓蒙書もこの大衆のあいだから宗教を駆逐しはしないであろう。だから、社会民主党の無神論の宣伝は、党の基本的任務に、すなわち搾取者にたいする被搾取大衆の階級闘争を発展させる任務に、従属されなければならないということである。

無神論の理論的宣伝と、すなわちプロレタリアートの一定の層のあいだにある宗教的信仰を破壊することと、この層の階級闘争の成功、歩み、諸条件とを、絶対的な、こえることのできない境界線で分離することは、非弁証法的にものを考えることであり、わたしたちは、宗教との闘争の問題を、抽象的に、いつも同じ抽象的・純理論的な説教にもとづいて提起するのではなく、具体的に、実際におこなわれており、なににもまして、またなによりもよく大衆を教育する階級闘争にもとづいてそれを提起する、弁証法的唯物論者でなければならないのである。無政府主義者の抽象的な、口先だけの、実際には空虚な「革命主義」におちいてもならず、また宗教との闘争をおそれ、階級闘争の利益によって導かれるのではなく、人の気をわるくしまい、反撥させまい、こわがらせまい、というちっぽけな、みじめな打算によって、「己れも生きよ、他も生かせ」という処世訓等々によって導かれる小ブルジョアや自由主義的インテリゲンツィアの俗物主義と日和見主義とおちいてもならないのである。